

成果報告書

2022年 5月 6日

公益財団法人 乃村文化財団 理事長 渡辺 勝 様

貴財団の助成金事業についてご報告します。

該当する助成の種類にチェック	<input checked="" type="checkbox"/>	研究助成	教育普及活動助成
フリガナ	トウキョウゲイジュツタイガクヒジュツケンキュカ ケンチクセンコウ カンキョウタイイチケン		
研究室名 学会・博物館名	東京芸術大学大学院 美術研究科 建築専攻 環境設計第一研究室 青木淳 研究室		
フリガナ	アオキ ジュン	職名	
代表者名	青木 淳	教授/建築家	
フリガナ	ササダ ユウシ	職名	
担当者名	笹田 侑志	教育研究助手/建築家	
所在地	台東区上野公園 1 2 - 8 東京芸術大学美術学部総合工房棟 4 階 環境設計第一研究室		
対象となる研究および教育普及活動の概要	【テーマ】 テンポラリーなりノバージョンとしての展覧会		
	【目的】 ディスプレイの本来的な役割は、情報の中身や品物自体に委ねられる側面が多分にあり、また一方的な情報伝達に留まる傾向が強い。ここでは商業エリアの空間を対象に、モノの移動、付加、撤去といった操作で空間を一時的に改変し、そのこと自体を「情報」として展示する。情報の総体としての空間では伝達の方向性が解体され、来訪者の多義的な解釈を可能にし、空間認識の解像度を高める。以上の仮説を実際の空間デザインと会期中の来訪者のフィードバックをもって検証することを目的とする。		
	【実施体制】 東京芸術大学大学院美術研究科建築専攻青木淳研究室の二期生4名が中心となり、場所の選定・調査・分析・設計・制作・発表・アーカイヴ等を行う。この際、教授の青木淳と教育研究助手の笹田侑志が監督・指導し、前年度に同様の趣旨の展示を行った一期生4名が補佐として助言・制作補助を行う。		
	【実施方法】 約1年間で、1.フィールドワーク・物件評価、選定 2.物件実測・図面化 3.模型化と事物の関係の分析 4.関係の組み換えの構想・設計/モックアップ制作 5.運搬・会場施工・展示 6.成果発表及びアーカイヴを行う。		
	【成果と社会的効果】 成果：空間を取り巻くモノを情報として扱うこと、それらを人に伝達する際の単一なベクトルを解体し多数化することで、来訪者の空間認識の解像度を高める。来訪者各々が人・物・情報に新たなつながりを見出すこと、そのこと自体が、豊かな価値の創造となる。 社会的効果：新型コロナウイルス感染症の影響で増加した空きテナントを対象としており、短期的利活用の手法として妥当性が評価されれば、展開可能性も高まると予想される。		
共同研究者等の有無	なし・ <input checked="" type="checkbox"/> (人数 4 名) ※共同の研究者等の氏名(学年・現職等)記入 大貫友瑞・河上朝乃・高井爽・松井一将(左記全て学生・修士1年/研究実施時)		
助成金額	60 万円 ※万円単位の整数で記入	主な用途	展示会場設営材料費・会場費
本研究に関する他の助成金受給の有無	なし・ <input checked="" type="checkbox"/> ※助成先を記入 令和3年度藝大フレンズ賛助金		

研究室名 学会・博物館名	東京芸術大学大学院 美術研究科 建築専攻 環境設計第一研究室 青木淳研究室
テーマ	テンポラリーなりノベーションとしての展覧会
<p>【目的】</p> <p>定義の再考 ディスプレイは器である空間と人・物・情報の関係性から成り立つものと言える。商業的には購買の動機づけを意図した情報の伝達という、送り手・受け手のコミュニケーションができればその目的の一端は達成される一方で展開される情報の双方向性は送り手と受け手というフォーマットに限定されたものとなりがちである。</p> <p>既にあるものの読み替え、空間自体を展示 本研究活動では、つながりを誘発する媒体としての空間と、人・物・情報の関係性自体に着目し、送り手と受け手という単一化された伝達のベクトルを解体し、多数化することを目的とする。これは、空間とはそもそも複数の事物の関係が張り巡らされている状態である、という本研究の立場を前提とする。広義には、自然環境も都市も全ては空間であり、我々は五感を介してそれらを情報として受け取ることで空間を認識している。</p> <p>実際の空間をデザインし、展示として公開することで得られる来訪者の立ち居振る舞いの観察、感想といったフィードバックから検証することを本計画の目的とする。</p>	
<p>【実施体制】</p> <p>本計画は、青木淳研究室二期生4名が中心となり行われた。本研究室は2019年に発足し、主なテーマを『テンポラリーなりノベーションとしての展覧会』として、研究と実践を重ねている。2020年度には一期生が実践として、展覧会「シン・マサキネンカン」を開催した。本計画は二期生がその手法のアップデートと都市への応用を試みたものである。この際、教授の青木淳と教育研究助手の笹田侑志が監督・指導を行い、一期生は補佐として助言や制作補助を担った。</p> <p>・展覧会実施時 施工に関し原則として外注は行わず、開催に用する不動産関連の契約は青木淳・笹田侑志が、9月以降のHP・ポスター・チラシ作成などの広報活動は笹田侑志・二期生が行った。会期中は二期生が2名以上在廊し、受付や会場の巡回の他、来場者対応を行った。</p> <p>・研究成果発表会 経過発表を含め計2回青木淳・笹田侑志の監督の下、二期生が行った。この際、東京芸術大学美術学部建築科に在籍する教授などから講評を受け、計画の更なる発展の契機となった。</p>	
<p>【実施方法】</p> <p>1.フィールドワーク・物件評価、選定 ・表参道地域においてフィールドワークを行い①空きテナントであるか②人の交通があるか等の項目について評価を行った。</p> <p>2.実測、図面及び模型化と、事物の関係性の分析/関係の組み換えの構想・設計 ・図面、模型上で関係性の組み替えを設計した。必要に応じて現寸のモックアップで検討。</p> <p>3.運搬・会場施工・展示と記録 ・大学で制作した什器を会場に運搬。運搬が難しい物に関しては会場で制作と設営を行う。 ・会期中は事物の複合状態としての「空間」をディスプレイする。会期中も来場者を観察して配置換えや修正を行う。</p> <p>4.成果発表及びアーカイブ ・2021年12月9日に大学構内にて成果発表会を行った。 ・会期中の記録映像を来場者に配信した。 ・本展覧会の資料を記録からアーカイブブックを作成した。</p>	

研究室名 学会・博物館名	東京芸術大学大学院 美術研究科 建築専攻 環境設計第一研究室 青木淳研究室
テーマ	テンポラリーなりノバージョンとしての展覧会

【研究・教育普及活動の成果】

・来訪者に空間の気づきをもたらす

前項【目的】で言及したように、情報伝達の単一のベクトルを解体し、多数化することは人に読解と振る舞いの自由を担保し、人の空間認識の解像度を高める。空間の本義に立ち返れば、ここでの経験は対象とするディスプレイ空間に留まらず、展示会場周辺や、帰路、自宅といったあらゆる空間における事物の関係に気づく契機をもたらす。来訪者各々が、自らを取り巻く環境に対し鋭敏になれること、日々見ているものに新たなつながりを発見できることが、ディスプレイが本来目指す「豊かな価値の創造」の一側面と考える。その提示をもって成果とする。会期を通して478名の来場者を記録した。

・空きテナント活用の手法としての可能性を提示する

本研究活動は原状回復を前提とした「展覧会」というフォーマットを借用して行うため、テナントの移り変わりの早い商業エリアとの相性が良いと考えられる。空きテナントを対象とした限られた期間での開催はこの側面をさらに強め、短期的活用の手法としての展開可能性を広く、業界内外へと提示することができた。

研究室としての企画であるため、ディスプレイの商業的側面を括弧に入れた企画内容としているが、店舗等の内装工事や、什器を搬入して開催するポップアップストアといったものと想定する時間の長さや作り方が異なる点でも手法の新しさがあると考えられる。

また、広報活動の成果として展覧会の様子が以下の媒体に掲載された。

・雑誌（写真左から）

-新建築2022年1月号/
新建築社（2021/12/28）

-新建築住宅特集2022年1月号/
新建築社（2021/12/18）

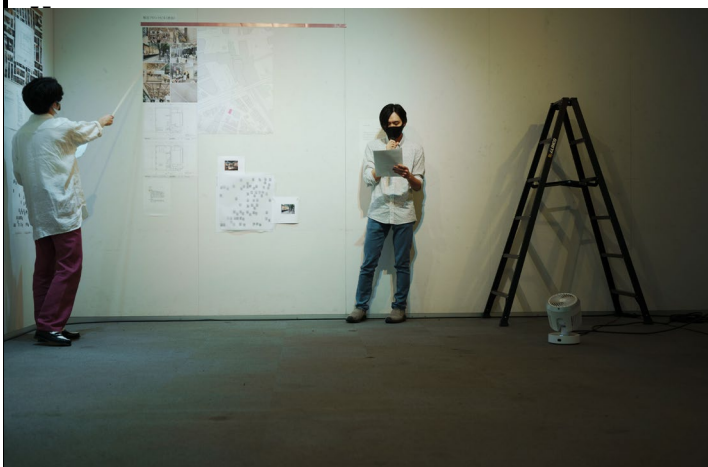
-GA JAPAN 174/
エーディーエー・エディタ・トーキョー（2021/12/27）

-GA JAPAN 174/
エーディーエー・エディタ・トーキョー（2021/12/27）



・Web メディア

-architecturephoto <https://architecturephoto.net/131536/>



中間成果発表の様子（撮影/徳山史典）



最終成果発表の様子（撮影/菊地菜里）

研究室名 学会・博物館名	東京芸術大学大学院 美術研究科 建築専攻 環境設計第一研究室 青木淳研究室
テーマ	テンポラリーなりノバージョンとしての展覧会

【今後の成果の活用と活動の展開について】

活動結果と今後の展望

展覧会で試みたのは「展覧会の展覧会」である。展覧会の空間に加えて、展覧会を行う時に生じる搬入や設営、搬出といった時間そのものの展示である。(図1) 会期中の動きは記録され終了後に来場者へ配信を行なった。本企画では、今この場所で展覧会を開くということにとどまらず、ショーウィンドウやテナントといった商業空間にある、中身の出入りが繰り返される場所について建築家として何が出来るかを考えることとなった。そういった場所ではある時には洋服が売られ、またある時にはアート作品が飾られる。それらのいわゆるディスプレイは、情報を発信する「展示物」とその「受け手」という二項対立的な構図をとっており、二者以外の構成要素は考慮されていない。『テンポラリーなりノバージョンとしての展覧会 (※) 』では、いわゆる「作品」によって新たな文脈を提示するのではなく、展覧会場内の複数の事物・人・ひいては会場の外にある街の中に張り巡らされている関係性を顕在化することで展覧会という空間の完成を目指した。テンポラリーなりノバージョンとしての展覧会は、都市でよく目にするガラス一枚で道から分断された場所がある意味で占領し、その空間の所属を建物内部から都市空間に取り替える可能性をもつ手段でもあると考える。

時間と渋谷の表象としてのディスプレイ

会場で行われたのはパフォーマンスではなく、ただ誰かにみせるということ意識しながら搬入・設営・搬出を行い、その途中で止めることである。周辺環境としての渋谷では常に、竣工している場所があれば工事中の場所があり、工事中の場所は竣工や解体といった仮のゴールに向かっていている。その場所たちは一斉にゴールを迎えるわけではないが、それでも私たちが「渋谷にいる」と呼んで体験する断面としての渋谷は毎時完成している。この展覧会の会場は、渋谷のようにそれぞれの操作が仮の目的に向かって動いている運動の集積であり、来場者が訪れる断面では何かが完成して何かが途中の状態に静止する。この展覧会の会場はただ設営としての運動と展示としての静止を繰り返して、俯瞰すれば搬入・設営・搬出という大きな動きをしていることが分かる。来場者はその動きの中のほんの一断面を体験することになる。一方で記録映像の配信は展覧会の巨視的な視点を提供するものだ。私たちにとって展覧会とは、渋谷の再開発やペンギンの泳ぎのように、様々な時間的スケールをもつ静止と運動からなる動きを、私たちのもつ時間的スケールに引き付けるための手法である。

テンポラリーなりノバージョンとしての展覧会の今後

東京芸術大学大学院美術研究科建築専攻青木淳研究室による「テンポラリーなりノバージョンとしての展覧会」シリーズでは毎年同じテーマのもと展覧会を行っているが、入れ替わる学生と会場の掛け合わせで展覧会は全く異なる様相を示している。本企画のメンバーと渋谷の掛け合わせが手法につながったように昨年度の実績と手法を引き継ぎながら本年度も研究活動を行っていく。

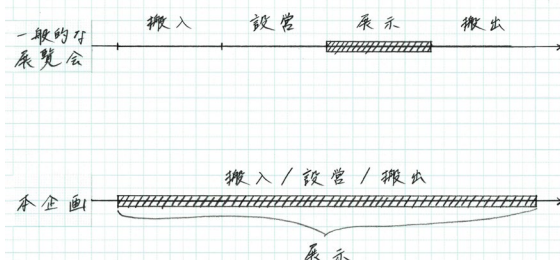


図1: 時間軸を読み替え、搬入搬出と展示を重ねる



会場外観: 大きな窓が道路に向かって開いて



会場内観: 室内からも外部の様子が伺える

(※) テンポラリーなりノバージョンとしての展覧会 展覧会が開催される時に起こる事象を観察すると、展覧会とはある空間を作品の配置によってある一定の時期に元の場所とは異なる空間にする行為である。一度作品を差し置いて考えれば、それはテンポラリーなりノバージョンと言える。本シリーズでは「作品」を展示するのではないあり方で空間を変容させるを試みておりその会場ではリノベーションが空間を改変する手段であり、展示内容の目的にもなる。